


在外研究員研究報告書

2019年12月3日 受付

所 属	グローバル・スタディーズ研究科・ グローバル地域文化学部		氏 名 Anne Gonon	
職 名	教授			
研究課題名	生活形式とケア研究			
研究期間	2018年 3月 1日 ~ 2019年 2月 28日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2018年3月1日~2018年8月29日	米国ニューヨーク市	ニューヨーク市立大学大学院	
	2018年8月30日~2019年2月28日	フランスパリ市	パリ第一大学バンテオン・ソルボンヌ	
研 究 費	万円	研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発     表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.	発行年月日	
	著 書 名	発 行 所 名	発行年月日	
	« L'espace de la catastrophe – Naissance de sujets et nouvelles formes de vie », <i>Formes de vie</i> (dir. Estelle Ferrarèse et Sandra Laugier	Paris, CNRS Éditions	2018年	
	« L'événement Fukushima ou la naissance d'une jeunesse politisée », <i>Autour de l'image : arts graphiques et culture visuelle au Japon</i> , (dir. Julien Bouvard et Cléa Patin)	Arles, Editions Picquier	2018年	
	« The Fukushima event, or the Birth of a politicized generation », <i>Being Young in Super-Aging Japan – Formative events and cultural reactions</i> , (dir. Patrick Heinrich and Christian Galan)	London, Routledge	2018年	
演 題	講 演 学 会 名	講演年月日		
Confrontation des notions de care : questions épistémologiques sur la circulation internationale d'un concept	Care : résistances et démocraties Paris. Paris 8	2018年10月18日		
#metoo#wetoo – paroles de femmes au Japon	Les Jeudis du Japon Toulouse 大学	2018年11月29日		
To learn what Democracy is – Youth and Political mobilization in the online social media age	Education to Democracy, Workshop CNRS and Japan Society for the Promotion of Science	2018年12月16-17日		

## 在外研究の報告書

### 生活形式とケア研究

2018年3月1日から2019年2月28日まで在外研究の期間をいただき久しぶりに研究に専念することができました。私の研究計画は二つの部分からなっていました。それは一つシールズという日本人若者の政治運動についての研究計画であり、もう一つはケア研究と生活形式に関する研究でした。

**ニューヨーク市立大学：**まず3月1日から8月29日までニューヨーク市立大学(CUNY)で半年を過ごしました。私を招いてくださったのは暦社会学者のジョン・トーピ教授です。トーピ氏は『パスポートの発見』という重要な作品を書いた研究者です。私たちは以前に市民性について意見交換を行ったことがあり、半年その交換を続けろうと思い、CUNYを選びました。ニューヨーク市立大学大学院センターという大学院はマンハッタン区の5番街にあり、1961年に設立しました。ニューヨーク市で唯一の博士号課程の公立総合大学院であり、文化系、理科系を問わずあらゆる専門分野を網羅します。しかもCUNYは市民活動を行う場所として知られていて、ニューヨークの市民と研究者との間にCUNYから放送されているラジオ番組を通してニューヨーク市で起きている問題に関する討論が行われています。ちょうど私が滞在した間に武器を使って学生を殺す事件がおきていたにも拘らず政治家たちは動かないという理由で若者が立ち上がって不満な声でデモなどを行っていました。その問題はCUNYのラジオ番組によって中心的なテーマとして取り上がっていて、若者のインタビューが行われました。それでは半年に図書館を通ったり、米国の若者と日本とのを比較し市民性と教育について研究したりした他に日常的に起きていた市民活動を観察することにしました。例えばニューヨーク市立博物館でニューヨーク市における運動の歴史を語る「LGBTムーブメント」という展覧会を何回も見に行きました。なぜならそこでニューヨーク市を19世紀以降社会運動の拠点にしたからです。人種のるつぼと呼ばれ、多種多様な人が大勢集まるニューヨークでは、昔から様々な社会運動が行われてきました。労働者運動、女性運動、黒人運動やゲイ運動などのコミュニティーの中から生まれた解放運動の歴史を写真やドキュメンタリーで知ることができました。ニューヨーク市での在外研究の特徴とえばそれは社会運動を幅広く考えるきっかけとなりました。2015年から2017年まで日

本で運動したシールズという学生運動は世界で起きていた他の若者運動とつながりを持って  
いたから日本と米国との運動の共通点と差異を考察しました。一方民主主義の規則をより  
守ること、若者の参加や発言を重視すること、運動の指導者を断ることなどはあらゆる共通  
な要求が上がった一方、他方差異はどこから生じているかを研究した。市民権に関する教育  
の形に原因があるのではないかと考えています。アメリカの滞在以降日本における市民教育  
と道徳教育との境界線を考察する研究計画を立てています。

在外研究の第二部はフランスのパリで行われました。

**パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌ**：パリ第一大学の哲学者であるサンドラ・ロージェ教  
授により招かれて半年セミナーや講演に出ることができました。ニューヨーク市での滞在と  
違い、パリにて研究グループで研究を以前に勧めていましたからパリに着いたすぐに研究活  
動に巻き込まれました。ロージェ氏が主催する国際研究グループにおいて生活形式という概  
念について研究が行われています。主なメンバーは哲学者であります。私は社会学的な視  
点を持って生活軽視という概念に基づいて研究グループの活動に貢献しました。

そもそも生活形式という観念は社会学、文化人類学、環境学や哲学と関連したケア研究や倫  
理学から生まれたものであり、5～6年前から様々なグループが国際交流や国際シンポジウ  
ムなどを行い、その議論を通じて、この観念を考察してきた。そしてその結果、人文社会学  
の分野において新しい学問的分野と新しいアイデアが生まれています。

こうした研究は、当初はとりわけアメリカ合衆国において展開されていましたが、それに  
着目したフランスの哲学者たちは、ケア倫理を自分たちの研究にどのように取り入れるべき  
かを検討し始めました。そしてその過程で、アメリカのジョンス・ホプキンス大学で教鞭を  
とる文化人類学者であり、暴力と社会的苦しみについての研究を行っているヴィーナ・ダス  
教授との対話が始まりました。そしてそこでもやはり、ケアと環境、人間の脆弱性が研究の  
対象とされているが、その根底にあるものは、ヒューマン・セキュリティと人間の命を守る  
形式について問うという、問題意識です。さらに私たちの研究グループでは、特にミシェ  
ル・フーコーとウイトゲンシュタインに関連した、生活形式の倫理についての討論を行いま  
した。そもそも生活形式を対象にする一連の研究は、ウイトゲンシュタインの哲学により生  
まれたものです。そしてそれに加えて、カヴェルの哲学について考察する過程において、社  
会的な生活形式と生物的な人間の生とが区別されながらも、その間の錯綜があることも明らか  
になりました。現在フランスをはじめとする、ヨーロッパではこうした研究は盛んに行われ

ており、そのうちのウィトゲンシュタイン研究が、倫理的、政治的な次元にまでおよぶ一方で、カヴェルをはじめとする研究は、言語が生活形式であるということに着目する方向へと進んでいきました。ここで注目すべき興味深い点は、以前から社会学や生命科学において重視されてきた生活形式という観念が、哲学の領域において、独自のものとして発展していることです。

そのような枠組みにおいて私は震災を対象にして数年前から研究を進めてきました。われわれが日常的であり、当たり前であると思っている生活形式は、常に危険にさらされています。それどころかそれを喪失する時には極端に脆弱を伴った状態が出現します。したがって、その喪失を引き起こす事態をどのように把握できるのか、その生活形式をどのように捉えることができるのか、ということを検討しなければならない。昨今相次いで起こる自然災害、産業・科学技術的災害によって、私たちの健康にもたらされるに測りしれないほどのダメージについて考える場合、そこで問われるものは、やはり倫理です。そこでは人間の消滅の可能性が危惧されるのであり、人間だけではなく生きている全てのものがその被害者となります。このような大惨事は生活形式そのものを可視化します。私の研究とは、そうした極端な状況の中で私たちがいかに身を守り、生存のための手段にアクセスすることができるのかという問題を、人間の尊厳の条件という観点から追求することです。

さらに平行にして世界で広がっていた #metoo と #wetoo の運動について、フランスで起きた特殊な運動、黄色いジャケットという運動についてパリの大学で討論が行われましたので、私はさらにあらゆる社会運動に目を向けることもしました。しかし普通の運動論を越えようとしてケア研究と関連して運動の可能性を再検討できるかという運動論にしたいのです。

**研究について；**1年間の研究成果を見ますと、二箇所では研究を進めたことによって、地域の社会でおきた社会運動を見ながら自分の運動論を述べ始めたかと思えます。それは日本に加わって米国やフランスにおいても見られたように一般の市民は政治から離れているのではなくて、より新しい政治の仕方を希望し、運動を起こします。若者やデモに参加している人々は現在の社会を本当の民主主義の規則を伴う社会に変化したいという希望を持って、要求を掲げるだけではなく、さらに改革の具体的な提案、アイデアなどを出しています。つまり現代社会の市民は自分が関係している事柄について良い専門家になったのではないのでしょうか。というのは運動の参加者はみんな自分の置かれた状況をよく理解した上で、経済的・社

会的な不公平、不平等をなくしたいという立場から考え、ただ個人的なレベルにとどまらずに、連带的に状況を改善するための方法を探し求めています。これからその運動の展開を見ながら自分の運動論をさらに深めたいのです。

グローバルスタディーズ研究科・グローバル地域文化学部 Anne Gonon